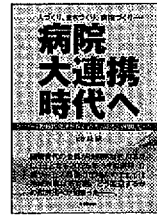


# 公私病連ニュース

今月の一冊

出版社：財界研究所

長 隆 監修



## 病院大連携時代へ

には若い時から積極的な発言と経営力で知られる星北斗理事長(公益財団法人星総合病院、新参者相次ぐ埼玉県で公的病院のリーダーである安藤昭彦院長)さいたま赤十字病院、真打は医育機関の代表として菊地臣一名誉教授(元・福島県立医科大学理事長兼学長)、この方達が何を語るか概ね予想は立つものの、しっかりともう一度再確認し今後の私の活動の羅針盤にしたかったのである。

委員会のこともあるので要注意)で真つ向勝負をしたこともある方である。

また、この本の多くの部分が人口減が進むなか東日本大震災で追い討ちをかけられた地域、というのもよく理解できる。公立岩瀬病院のフェニックスの再生、特に産科の復活が今後の病院再生・地域再生のヒントにもなり得る。競争より協同の時代はすぐそこに来ているのである。

隣接する2つの市民病院の合併は成功し易い一方、高知県のように県立と市立の合併は時代の流れになると思っていたがあまり進んでいない。

私の造語であるが「貧界」に住む小生は財界が嫌いで、経団連やそのスポークスマンである日本経済新聞は好きになれない。特に医療や社会保障に冷たい論調が多いのが気に入らない。連載小説や文化面、スポーツ評論などは4大紙を超えているのだが。しかし、この本は読まざるを得なかった。

また、監修者の長隆氏(東日本税理士法学会会長、監査法人長隆事務所代表)は総務省や厚生労働省の各種審議会、ワーキングなどで議論してきた仲間(論敵?)でもあり、特に地方の中小病院のあり方検討委員会(目的は、無くし方)検討

良質な医療と優良な経営が相容れない人口減、財政難に悩む地方公生病院のあり方は約20年前から頭在化していた。しかし4年前の医療介護総合確保推進法で地域包括医療・ケアが国の大方針として確立され、病床機能報告制度により民間病院優遇、公立病院減床の地域医療構想が着々と進行している今こそ、この本を読んでみる価値が増している。本書のChapter3に出てくる厚生労働省医政局の佐藤美幸氏(医療経営支援課長)は最後に読んだ方がよいのでは。彼のフリーフィングを個人的にも会議でも受けたことがあるが、やはり現場のケー

私が関与した兵庫県立柏原病院と柏原赤十字病院の統合(来年開院)、兵庫県立姫路循環器病センターと社会医療法人製鉄記念広畑病院(旧・新日鐵広畑病院)の合併(5年後開院予定)なども成功例となることを願っている。静岡県の掛川市と袋井市、兵庫県の三木市と小野市のように

この本の著者のような改革者は恐らくは眠れぬ夜が続き、行間には汗と涙が詰まっているということを忘れてはいけない。誰でもが可能ではなく、また多くの協力者も必要である。人的資源や財源の再分配からも、今後真っ先に必要ではなからうか。保険あって医療なしや無保険者の激増など、国民皆保険制度の空洞化が目立つ昨今、院長などの病院幹部などだけでなく、自治体の首長や議会関係者、一般市民にも読んでいただきたい一冊である。

自治体病院の昔からの仲間である栗谷義樹理事長(地方独立行政法人山形県・酒田市病院機構)や三浦純一院長(公立岩瀬病院)、更

推薦者：邊見公雄(全国公私病院連盟副会長、赤穂市民病院名誉

院長)

発行所  
一般社団法人全国公私病院連盟  
東京都渋谷区神宮前2-6-1  
食品衛生センター4階(150-0001)  
TEL03(3402)3891 FAX03(3402)4389  
編集  
広報委員会  
毎月1日発行 年間購読料1,000円  
(購読料は会費に含まれます。)